

---

# 宵闇の皇子様と明星の皇子様

佐伯立夏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

宵闇の皇子様と明星の皇子様

### 【Nコード】

N2228U

### 【作者名】

佐伯立夏

### 【あらすじ】

タイラントという国を舞台とした物語。

激情を胸に秘めて、仮面を付ける妻マリエッタと夫ガイゼル。

年下皇子ジークフリードと年上王女ウルリカの結婚から始まる恋愛。

様々な愛と恋が交錯する。

個人サイトにて、連載中の作品になります。

## 同盟（前書き）

サイトから移しました。

## 同盟

「ねえ、ガイ。私達の利害は、一致してるわよね？だったらどうかしら、私と手を組んでみない？」

「ああ…いいぜ」

それは、幼き頃。

二人の子供が交わし合った盟約。

それは、足りないものを補い合う為の盟約。

少年は、自身の力不足を自覚している為。

少女は、自身一人では歩めぬ道を歩む為。

互いの持てる力で、互いを補い合う事にした。

そして、何時しか。

少年と少女は。

勇猛なる金獅子皇子ガイゼル。

清廉なる宵闇の王女マリエッタ。

人々に、そう呼ばれる存在になっていた。

愛情という名の感情が一切、絡まぬ二人。

あるのは、利害のみ。

互いに互いを利用し。

共に道を歩む間柄。

そして、必然的に、二人は婚姻を結ぶ。

目的の為ならば、結婚すら彼等は利用する。

何故なら姻戚関係は、力を増すには、一番有効な手段。

比類なき力を誇る大国タイラントと交易で莫大な富を生み出すワース王国。

。

武と富。

この二つが強く結び付く時、莫大な力となり。

それは、二人の望む未来を引き寄せる。

少年と少女が手を組んだ日から、物語は急激に加速する。

互いが望むのは、覇道を歩む事。

そして、時が経ち。

勇猛なる金獅子は皇帝となり、覇帝と呼ばれ、清廉なる宵闇の聖女は宵闇の皇妃と呼ばれるに至る。

しかし、時が経っても、二人の間には、愛情という名の感情は芽生えない。



何故なら、二人の間には、しっかりと線引きがされている。

マリエッタが、ガイゼルへ望むは共に歩む事。

ガイゼルが、マリエッタへ望むのも共に歩む事。

二人は、共に歩むに愛情は関係ないと考えている。

愛は虚ろ。

恋は幻想。

明確な利害の一致で繋がる二人の間には、そんな感情は入り込む隙間もない。

ガイゼルはマリエッタへと愛は囁けない。

そして、マリエッタも、自分へガイゼルが愛を囁く事を望まない。

ガイゼルが愛を囁くのは、側室にだけ。

しかし、愛を囁きはしても、必ず公の場にはマリエッタだけを伴った。

それには、マリエッタへガイゼルが確約したある事が関係していた。

愛とは虚ろなモノ。

だが、時に愛は何よりも、厄介な代物に変わる。

しかし、利害。

そののみを絆として成り立っている以上。

愛が権力を歪ませる事も、愛と権力を〓に結び付ける事も、許す事は出来ない。

「ガイ。私は貴方から、愛も情も欲しくない。けれど、だからって私は惨めな立場に立つ気はないわよ？」

そう言ったマリエッタへガイゼルは。

「約束しよう。愛を囁く相手は数多居るが、共に歩む相手はお前一人だけ、公の場では、お前を優遇すると」

と、返した。

この時より、明確に愛と権力は隔離された。

そして誰が、ガイゼルに愛されようと、マリエッタは後宮の主。

勿論、側室や愛妾達に権力が無いとは言わないが、皇妃の発言力と権力には到底、敵わない。



## 始まり（前書き）

サイトから移す作業って、ケータイだと大変ですね。指が痛くなっております

## 始まり

それは、マリエッタとガイゼルが婚姻を結んでから、十年が過ぎたある日。

朝の定例会議の席で、臣下の一人からある言葉が出た事で、波紋を生んだ。

それは、定例会議も終盤へ差し掛かろうとしていた時の事。

「陛下。どうか、私めに発言をお許し下さい」

そう声を上げたのは先日、大臣補佐に任じられたばかりのマーフィルという男。

「……………」

ガイゼルは、無言でマーフィルを一瞥し、動作で発言を許可した。

すると、マーフィルは。

「陛下。まずは昨日、御側室ララ様に、第二皇女様が御生まれになった事、民の一人として喜び申します」

と、発言し続けて。

「現在、我が国には、二人の姫君と三人の皇子殿下がご誕生され、民は喜びを隠せませぬ。しかし、我が国の民が、真に望むは、皇妃様へ御子が出来る事でございます。どうか、この民の願いをお聞き届け下さい」

そうガイゼルに視線を合わせて言った。

途端に、辺りをシーンと不気味な静寂が支配した。

しかし、すぐに上座付近に座る貴族から声が上がった。

「マーフィル殿。貴公は場を弁えるという事を知らぬとみえるな。加えて、その発言は不敬だぞ」

すると、マーフィルを軽視する声音を隠さない発言に、同調するよ  
うに周りからも、似た様な声がマーフィルへ向けられた。

「まさしく、マーフィル殿。貴公は、ご自分の立場を理解していな  
い様ですな」

これが、別の者であったなら、こうまで言われはしないだろう。

せいぜい、周りから失笑を買っぐらいで、済む筈である。

だが、それは貴族が発言した場合であり、マーフィルの様な立身出  
世をして、のし上がる相手に、彼等、貴族は容赦しない。



ここぞとばかりに、吊るし上げて、あわよくば潰してしまえと、考  
える。

しかし、彼等は忘れていた。

「お前達、見苦し真似をするな」

ガイゼルの前であつた事を。

実力主義のガイゼルは、生まれだけに、こだわる無能な者が、心底  
嫌いである。

故に、今の状況はガイゼルの苛立ちを掻き立てる。

「サントス。控えろ、お前は皆を煽り過ぎる」

その言葉に、サントスは。  
「はっ…申し訳ございません」  
と、言って引き下がった

しかし、ガイゼルは冷ややかな視線をサントスへ向けたまま、マーフィルの名を口にした。

「そなたは、マーフィル…ウインだったか？」

「はい。マーフィル・ジルバル・ウインでございます」

「では、マーフィル。お前に聞くが、民は何故、皇妃の子を望む？世継ぎならば、三人の皇子から適任者を選べば良いだけだろう」

その当然の疑問に、マーフィルは、静かに答えた。

「民の中でも、強く皇妃様に御子をと、そう望むのは、先々代の陛下の時代から生きる年寄り達でございます。彼等は先の陛下が、陛下と正式に決まるまで、国内外で繰り返された血生臭い争い事でも、鮮明に覚えています」

その瞬間、ガイゼルはマーフィルが言わんとする意味を理解した。

ガイゼルの父であり、先帝でもあるトーガは、側室から生まれた第三皇子であり、本来なら皇位を継げる立場ではなかった。

しかし、先々皇妃には子供が居なかった。

先々帝には、三人の側室に、一人ずつ皇子がいた。

だが、第一皇子は病弱な生れで、成長してからも、まともに床から出る事もままならず、第二皇子は健康だが、産みの母が奴隷上りの為、それが障害となった。

そうなると、必然的に第三皇子だが、健康であり、母親の身分も高いトーガは皇位第一継承者という立場に立たされる。

この事もあり、先々代皇妃と側室との元から悪かった仲は、最悪だった。

だが、先々帝が病に倒れると、状況は一変した。

病床の先々帝に、子供の居ない皇妃が、第二皇子の後見人を願いだしたのだ。

これには、先々皇妃のある思惑があった。

だが、そこから先は、語る事を躊躇いたくなる程の醜い争いが、周りを巻き込み繰り広げられた。

そして、簡単に結果だけを言うなら。

実の子を持つ側室の勝ち。

先々代皇妃は、土壇場で、実の子でない第二皇子に裏切られた上、一連の騒動の責任を取る形で、帝都から遠く離れた離宮へと追いやられてしまった。

そして、全てに決着が着いた後も、この一連の騒動は、民に深い傷を残した。

そして、その傷は、憂いを生んだ。

この国の民達は、子供が居る側室達よりも、皇妃であるマリエッタの方が、発言力も、権力も上だと理解している。

それ故に、このまま皇妃に子供が生まれず、皇帝に何かあれば皇妃の力が、他の者より強いという事実の前に、三人の皇子の母親達は皇妃マリエッタに気に入られようと、我が子を世継ぎにする為、動くだろう。

そうなれば、先々代の時よりも、更に酷い事態が待っていると、年寄り達は危惧した。

そうならない為に、強い力を持つ皇妃に、世継ぎを産んでもらいたいと、強く願う。

「マーフィル。お前もまた、民と同じ懸念を抱いたか…？」  
「恐れながら、その通りにございます」

（やはり…避けては通れんか…）

ガイゼルとて、同じ懸念をしなかった訳ではない。

ただ子供という事に関しては、自分が、どうこう考えても、どうにもならない事柄であると、ガイゼルは痛感していた。

だが、かつてマリエッタへ子供を欲しいかと、聞いた時。

彼女は不思議そうに。

「あら、あなたは、私に産めというの？」  
そう首を傾げられた。

マリエッタの中には、権力を維持する為に、子供を産むという選択肢は初めから存在しなかった。

だから、試しにある発言をした。

「普通、女なら子供を産みたいって思うもんだろっ」

しかし、そのガイゼルの発言に、マリエッタは、些か不機嫌な顔と  
声音で。

「ガイ……。あなたって、考えが固いのね。女だからって、その誰も  
が、子供を欲しがる訳じゃないの……。それに、子供は玩具でも、道具  
でもないのよ？。無責任に作って良い存在じゃないわ」  
と、言い放ち。

更には。

「あなた、子供が欲しいなら、私とじゃなく、別の人と作るべきね」  
と、言った。

しかし、子供自体は嫌いな訳ではないらしい。

その証拠に、マリエッタは密かに帝都内にある幾つかの孤児院へ月  
に何度も、慰問をして孤児達を可愛がっている。

特に、まだ乳離れの済んでいない赤子を腕に抱く時、その顔は慈愛に満ちていたと、報告が来ている。

愛情は要らない。

必要なのは、共に歩む事。

子供は不用意に作るべきじゃない。

そうはつきり明言する相手に、この事態をどう告げれば良いのだろうか？。

決して強くは言えない。

だが、皇妃という立場の人間に、マリエッタに子供が産まれる事が民の願い。



将来、強い力を持つ皇妃に子供が居れば、皇位継承のゴタゴタが起きる確率が下がるなら、産んでもらわねばならないのだろう。

しかし、ガイゼルは自分では到底、マリエッタを説得できるとは思えないと、考えた。

だからこそ。

「マーフィル。お前や民の願いは、よく分かった…。しかし、こればかりは、私一人ではどうにもならない」

と、答える事しか出来ない。

しかし。

「分かっております」

そう返されるのは、予想の範囲内だったのか、マーフィルは特に、気にした様子はなかった。

だが、このあと、予想外の出来事が起こる。

それを目の当たりにして、マーフィルも、周りの者達も、自分が驚きで、固まる事となるうとは思ってもいなかった。

「無駄かもしれんが、皇妃には、この件、しっかり伝えよう。さて……」

そう言って、ガイゼルが中断していた会議を再開させようとした瞬間。

「陛下。無駄とはなんですか？民の為ならば、孕んでみせましょう」という声が、議場に響いた。

その声の主は、皇妃マリエッタだった。

その後ろでは、影の様に付き従う一人の護衛騎士が、意地の悪い笑みを浮かべて、立っていた。

その顔を見た瞬間、思わず、眉を寄せたガイゼルだった。

このタイミングで、皇妃が、出てくるのは、偶然にしては出来すぎた展開といえる。

ガイゼルは、いち早く、この状況を聞き付けて、面白そうだの一言で、あの騎士が、マリエッタをここへ案内したのだらうと、推測した。

艶やかやな長い黒髪を真珠の髪がさりで結い上げ、体にピッタリとフットしたパールホワイトのドレス姿で、ガイゼルの前までやって来ると、マリエッタは。

「子供を私利私欲の為、その為だけに、産むのは嫌だけれど…民が望み、民に愛される子なら私は作るわよ」

艶やかに、微笑みながら言った。

その言葉に、マリエッタらしいと考え方だ、そうガイゼルは思った。

だからこそ、ガイゼルは。

「そうか?……なら早速、今夜から励むか?」  
そう返した。

すると、マリエッタも。

「ええ。良いわよ？今日から、一週間は一番孕みやすい周期だから、もしかしたら、一発で決まるかもね」

そう切り返す。

このやり取りは、やけに簡単になされたが、本来なら人の大勢、居る場所で口にするべきでない単語が出た。

しかも、それが男であるガイゼルではなく、女であるマリエッタが、オブライントに包まず、そのまま易々と言葉にした事に皆、固まった。

この二人。

マリエッタとガイゼルには、友人という関係として、互いに深い情がある。

今、この場の二人は、利害で繋がる関係ではなく、友人として喋っていた。

普段、二人は公式の場で、こうまで柔らかな口調で、互いへ話したりはしない。

この二人。

マリエッタとガイゼルには、友人という関係として、互いに深い情がある。

今、この場の二人は、利害で繋がる関係ではなく、友人として喋っていた。

（おお、タヌキどもが、どいつもこいつも、馬鹿面曝してんなあ。やっぱ……ついて来て、正解だったぜ。というか、お前さん等は、普段との落差ありすぎんだよ）

騎士は、扉に背を預けまま、固まったまま反応できない者達へ軽視の視線を向け、次に友人であり、守るべき主の二人に、意味深な視線を向けて、声には出さず、そう毒づいた。

## お互いに

10歳で、初めて会った時。

ガイゼルは、マリエッタをこの女なら、共に歩むに相応しいと感じた。

マリエッタも、この男なら歩めると、感じた。

柔らかな笑みの裏に、隠された鋭利な色。

彼女なら、必要とあらば、どんなに自らが血に塗れ、汚れようと構わないだろうと、ガイゼルには、理解出来た。

彼なら例え、血に濡れた自分でも、臆したりしないだろうと、マリエッタは思った。

男と同じ目線で物を見る女。

同じ目線で物を見る様な女を疎まぬ男。

まさに、最高の女。

まさに、最高の男。

互いに、そう互いを評価した。

強くしなやかな女。

マリエッタの事をそうガイゼルは思った。

もし、マリエッタが男として生まれていたならば、自分では、到底  
太刀打ち出来ないだろう。

だが、幸運にも、マリエッタは女として生まれてきた。

だからこそ、自分の敵ではなく、最強の味方となってくれた。

その事に、ガイゼルは神へ、感謝した。

マリエッタは、男に生まれたかった。

だが、女として生を受けた以上、望みを叶える術は、ただ一つ。

幸いなことに、同年代には、共に夢を叶えるに足るガイゼルがいた。

マリエッタもまた、その事で、神に感謝した。



## マリエッタという女

成婚して、十年。

この間、ガイゼルには、側室達との間に、男女合わせて五人の子供が産まれていた。

普通なら、皇妃より先に、側室が身籠る事はあまりない。

何故なら、通常は側室が自分より先に懐妊する事を皇妃は快く思わない

あの手この手で、邪魔をするのが常。

だが、マリエッタは側室が懐妊したとの知らせの度、ガイゼルには、曇り無い笑みで祝辞を述べ、懐妊した側室には、盛大に祝いの品と、労いの言葉を贈っていた。

これが、やせ我慢ならば、あっぱれだ。

しかし、マリエッタに関しては、そうではない。

ガイゼルと自分が突き進む覇道を継承出来る者ならば、誰がガイゼルの子供を産もうが、マリエッタには、どうでもよかった。

もし子供の母親が、馬鹿な事をするなら、排除するだけの事。

必要なのは結果であり、過程では無い。

彼女こそ、どこまでも、覇道を歩む為に生まれた様な女。

## 夜に向けて

実は、ガイゼルとマリエッタ。

この二人、子供を作ると言ったは良いが、閨を共にするのは、初夜以来だった。

二人は、度重なる肉体関係が、切り離せない情を生むと、理解していた。

その為、婚礼の儀式として、一度だけ閨を共にしただけなのだ。

だが、ここで、一つ疑問が沸く。

ガイゼルは、ともかく、成熟した一人の女性が、十年間も、自身の性的欲求を我慢できるのか？である。

勿論、マリエッタとて、この十年間、清廉潔白な身だった訳ではない。

ガイゼルに、側室達が居るように、マリエッタにも、何人かの愛人

が居る。

ただし、マリエッタの場合は、不用意に、他の男の子供を孕む訳にはいかない。

その為、愛人は、そのどれもが、後宮の宦官であつたり、子種が無いと、何人もの医師から通告されている男達だった。

「肌の艶を出すには、どれが良いでしょうね？」

「私は、オイルマッサージが良いと思うわ」

「なら、この香油なら、マリエッタ様の肌をより良く、輝かせるのでは？」

「いや、待て……それならば、こちらのチュロ蜜で出来たローションの方が良いのではないか？」

その場では、何人かの宦官と女官達が、お互いに意見を出し合っていた。

彼等、彼女等が今、相談しているのは、今夜の事。

マリエッタが、ガイズェルと、十年振りに閨を共にする。

それは、マリエッタ付きの宦官や女官達にしてみたら、十年振りの大仕事。

より良く、輝かせ、より良く、美しさを醸し出す。

それは、彼女等と彼等の腕の見せ所。

普段、マリエッタの身の回りの世話を担当しているのは、宦官であつたり、女官であつたりと、決まっていない。

その為、本来なら女官達だけで、話し合う事柄も、宦官達が加わる。

これは、マリエッタが、愛人と過ごす時は、宦官達が、周りに侍っているからだ。

しかし、今回。

マリエッタは、そんな宦官と女官達を遠めから眺め。

「皆、熱心ねえ」

と、他人事の様に呟いた。

すると、呆れた様に。

「おい…ありや、お前さんの為にやってんだろがよ」

そう守護騎士のジーンがマリエッタの背後から忍び寄り言った。

だが、慣れているのか、すぐ後ろからする声に、マリエッタは、さして驚く事なく、ジーンに問う。

「ジーン。貴方、ホントに、神出鬼没なこと…」

「それは、お褒めの言葉と受け取るか」

言うと、ジーンはマリエッタの頬へと軽いキスを贈った。

そして、された方のマリエッタは、これにも慣れているのか。

「時々、貴方って、不敬が過ぎるわよねえ」

口では、そう言いながらも、自分からも、ジーンへ軽いキスを贈る。

「そんなの…いまさら…だろ…?」

「確かにね…私も、今更、貴方から形ばかりの敬意を示されても、どうしたら良いか分からないわ」

皇妃マリエッタ付き騎士ジーン。

唯一、宦官でも無いのに、マリエッタの側に付く事を許されし男。

ジーンは、例えマリエッタが全裸で眼前に居ようが、襲わないし劣情も感じない。

それは、マリエッタに、女としての魅力がないからではない。

ジーンは忠義を捧げるマリエッタに、色香を感じる事ができない。

幼少時代から、共にある二人。

今更、そんな相手に、劣情を抱く理由がジーンにはない。

宦官や女官達が力を尽くして、磨き上げ。

誰よりも、美しく着飾ったマリエッタ。

しかし、その姿を見たガイゼルの反応は。

「おっ…これまた着飾ったな」  
というモノだった。

その言葉に、マリエッタは些か拗ねた口調で、言った。

「貴方は…もう少し、マシな褒め方は無いの？」

しかし、そんなマリエッタに、ガイゼルは言った。

「今更だろ？それに俺は、愛しても無い女を華美に褒める趣味は無いんでな」

「はつきり言うわねえ…まあ、真実なんだけど」

二人の間で、繰り広げられる言葉遊び。

甘さと軽さ。

織り交ぜられる本音と嘘。

普通の男女の会話。

そんなモノはマリエッタとガイゼルの間には、存在しない。

強かな女と覇者たらしとする男。

会話すら、ある種の戦い。



男は気を抜けば、女に食われてしまう。

## 夜

見るのは、二回目だが、やはり、マリエッタの身体は美しいの一言に尽きるなど、ガイゼルは思った。

艶と張りを保つ白くなめらかな肌。

くびれた腰と形の良いバスト。

シーツに波打つ宵闇の髪。

艶やかに濡れた唇。

その全てが、一つの芸術品の様だとも、感じた。

やはり、定期的に抱かなくて正解だったなと、ガイゼルは思った。

こんなモノを抱き続けたら、間違いなく自分は嵌まる。

抜け出せない深みに、嵌まる。

一方のマリエッタも。

180を越える長身に、程よく付いた筋肉。

精悍さの強まった顔。

十年前よりも、野生味が増したガイゼルの身体と雰囲気を見て。

客観的には、凄く、良い男、なのよねえ。  
と、思った。

そして、マリエッタも、やはり度重なる情交を避けて、良かったと思っ  
た。

自分とて、女。

理性で制御できない事態が起きないとは言い切れない。

二人は、同じ事を思った。

（この一回で決めないとヤバイ）

という共通の危機感を抱いた。

## 激情

そして、全てが終わった後。

マリエッタは一人、考えた。

今、自分の中にある感情。

これは危険な兆候。

ソレは回避するべき感情だと。

身に受けた情熱は、決して、自分のモノにしてはいけない熱を含んでいた。

自分が、それを欲する事。

それは互いの身を破滅へ追い込む事に繋がると感じた。

恋。

愛。

そんな生易しい感情ではない感情が、身の内に燦るのをマリエッタは押さえ込む。

利害。

それで、二人は今まで成り立ってきた。

それに今更、二人の間に、愛だの恋だのが芽生える事は無い。

何故なら、二人の互いへ向ける感情は、最初から愛と恋が含まれている。

マリエッタは、覇道を歩むに相応しいガイゼルの素質を愛し、ガイゼルも、マリエッタのその性質を愛した。

マリエッタは、ガイゼルの気概に恋し、ガイゼルも、マリエッタの気概に恋をした。

だが、二人はそれを恋愛という粹や、男女という粹に当て嵌めなかった。

二人には、分かっていた。

自分達の感情は互いを壊す程の熱を帯びていると。

自分達の愛情は、攻撃的な愛情。

このまま突き進めば、互いを傷付け合う。

そう理解していた。

全てを無かったことにしたい。

だが、無かったことになど出来ない。

だから、この想いは心の奥深くへと、仕舞い込む。

何重にも、鍵を掛けて、忘れた振りをしよう。

一方。

ガイゼルも、全てが終わった後。



身の内に燦る強烈な熱。

それを発散させる手っ取り早い方法を取る為に、後宮へと来ていた。

抱いた事で燦った熱。

それは、別の女を抱く事でしか、発散させる術はない。

マリエッタとの行為、その全てを忘れる事は、ガイゼルにも、出来ない。

だから、別の女を抱く。

あの感触も、匂いも、あの出来事の全てを別の感情と感覚で、塗り替えたかった。

ガイゼルが相手に選んだのは、ナディーンという大人しく控えで、栗色の髪に茶色の瞳の女。

マリエッタとは、何もかも違うこのナディーンをガイゼルは身の内にある凶暴な感情が消え去るまで、離さなかった。

だが、次の日の朝。

ガイゼルは、少しやり過ぎたなど、反省した。

何故なら、昨晚の相手を務めたナディーンが、ガイゼルの反応に  
々々、怯えているからだ。

これが、他の側室なら、何度も閨を共にした女ならば、態度も違  
うだろうが、このナディーンは昨晚で、二回目の閨。

一度目との違いに、戸惑いと恐怖を抱くのは無理も無い事だった。



## 騎士の独白

俺から見れば、あいつらは、完全な相思相愛だと思うぜ。

でも、あいつらの愛。

それは破壊的で、相手を完全に、独占し尽くさなければ、収まらない衝動を伴うモノ。

しかし、あいつらは立場が立場。

その立場で、相手を完全に独占出来るか？といえば、それは無理な話。

あいつらは、お互いだけを求めている立場じゃない。

皇帝は、妻にばかり構ってはられない。

皇妃も、夫ばかりに気を取られてはられない。

あの二人は、ある意味。

最高で最悪な組み合わせ。

互いの想いの末にあるのが、破滅なら本望なんじゃないか？。

だが、それを言ったら、マエリエツタは、あいつは鼻で笑いやがった。

『アハハっ……ねえ？…無理言わないでちょうだい…もし、破滅を選んだとしたら、破滅するのは、私達だけじゃ済まないのよ？』

そんな事、言われなくたって分かってる。

そう顔に出てたんだろう。

『可愛いキティ（子猫）。貴方は、何も心配しないで良いのよ……これは、私が片を付けるわ……』

艶やかに笑ったあいつ。

昔から、あいつは俺を可愛いキティと呼んで憚らなかった。

今でこそ、体面をやつがあるから、名前で呼びやがるが、どうせ俺は、あいつにとっては、いつまで経っても、キティなんだろうよ。

二人は自分達の間で愛も恋も、必要ないと。

そう断じる事で、利害という目に見えた絆を得る事にした。

肉体の交わりを避けたのも、利害を守る為。

だが、俺から言わせれば、誰を愛そうが、誰と寝ようが、あいつらは根本的に、何も変わらない気がする。

何故なら、二人の心には決して、消す事のない狂おしい程の感情が、燃えつつづけている。

かつて……。

汚泥の中で、死ぬ定めだった俺は、あいつに掬い上げられた。

遙か昔。

俺は、ある国のスラム街で生活していた。

今、思い出しても、あれは最低な生活だった。

時に泥水を啜り、腐ったモンでも生きる為に、口にした。

今日を生きるので精一杯の毎日。

明日の保証なんて、全くない。

俺は、食ってゆく為に、なんだってやった。

だが、ある時。

俺は、ある事でへまをやらかした。

普段なら絶対にしない些細なミス。

でも、その結果。



仲間と呼ぶには打算的な奴らを窮地に追い込んでしまった。

当然、その責任を取る形で、集団リンチに掛けられた。

ギリギリで、致命傷を避けたやり方だったが、時期が悪かった。

俺は運が悪かったんだ。

季節は冬。

冬場に、リンチされた挙げ句、道端に放置というやり方では、生き残る確率は、限りなく低かった。

事実上の死刑が、執行される筈だった。

全身に、大小様々な傷を負って、意識が薄れかけていた。

俺は沈みゆく、意識の中。

(…呆気ない最後だな…けど、まあ…良いか…)

そう自分の死を覚悟していた。

だが、そんな時。

俺を覗き込む一つの影があった。

『あらら、汚い…でも、あなた…良い目をしてる…』

それは、それまでの俺が聞いた事の無いコロコロと、鈴を転がしたような声。

力無く目を開けると、そこに居たのは、見た事も無いきらびやかな服を纏った少女。

突然の事だったが、俺は反射的に、そいつを睨みつけていた。

すると、そいつは言った。

『ふふふ……あなた、猫みたいだわ。そう…まるで、警戒心を剥き出しにした子猫ね……』

何を言ってるんだこいつ？。

俺は、そう思った。

『ねえ…貴方、名前は？』

『……………』

『あら、貴方は名無しなの？……それとも、私とは喋りたくない？』

この時、どちらかと言えば、俺は喋りたくない訳じゃなくて、痛みで喋れないだけだった。

ジクジクと痛み、熱を持つ傷口。

だが、まだ痛みがあるだけマシかと思い直した。

だって、痛みを感じなくなったら、もうおしまい。

答えない俺に、そいつは。

『ねえ…あなた…生きたい？生きたいなら、頷くだけで良いわ』

と、言った。

何故だか、その時。

俺は、咄嗟に頷いていた

この時から、マリエッタという存在は俺にとって逆らえない存在になった。

その後、怪我が完治してから、ある事がキツカケとなり、俺は死に物狂いで、剣を覚えた。

今までの戦い方じゃ、ダメだと気付いたから。

狂ったように、知識を貪った。

自分を救った少女を守るために…。

彼女の剣になると、決めたから…。

## 懐妊

人という生き物は、例え、一度の性交でも、新たな命を身に宿ってしまう事がある。

望む望まぬに関わりなく、孕みやすい時期に、何の対策も取らずに、性交した場合。

勿論、孕む確率は、グンッと跳ね上がる。

あの日から、三ヶ月後のある日。

マリエッタは、体調不良を訴え。

それと時を同じくして、全く、食事を口に出来なくなった。

食べ物の匂いを嗅ぐだけでも、吐き気を催す様になったからだ。

これは…もしや…？と、マリエッタは思った。

勿論、周りの女官達も、絶対に、そうだ！と思い。

そして、その情報は、すぐに城中へ知れ渡った。

すぐに城からは、マリエッタの元へと女医が差し向けられた。

全ての診察を終えた女医は、静かに口を開いた。

周りでは、宦官や女官達が、固唾を吞んで見守っていた。

「おめでとございますと、臣下の一人として、申し上げます」  
「では？」

「はい。」懐妊でございます」

その瞬間。

周りから、歓喜の声が上がった。

あのあと、しばらく、お祭り騒ぎが続き、全ての者が、浮足立っていた。

何故なら、城中。

いや、国中に皇妃懐妊の知らせは駆け巡ったからだ。

勿論、マリエッタの元には、沢山の訪問者が訪れた。

気の早いものなどは、待望の世継ぎだと感涙し、駆け付けた愛人達は、マリエッタの妊娠を心から喜んだ。



だが、すぐに次々と来る訪問者も、マリエッタの体調を考えた侍女や女官達により、部屋から閉め出される事になった。

そして、やっと一人になれたマリエッタは、なだらかな腹部を撫でながら、物思いに耽った。

「本当に居るのかしら？あまり、変わったように見えないのに」

女医が帰ってすぐ、そう言ったマリエッタに、出産経験者のある侍女は、あと数ヶ月もすれば、腹部が張り出し、胎児の発育が目に見えるようになると言った。

これから先は未知の領域。

自分が母親になる。

なにか、こそばゆい感覚をマリエッタは覚えた。

「これが…母性なのかしら？フフっ…おかしいわねえ…」

## 憩いと戸惑い

マリエッタ懐妊の知らせが、国中へ駆け巡るより少し前、ガイゼルは後宮の中庭で、柔らかな女の膝に頭を寄せ休んでいた。

ここ最近、ガイゼルはある女の元へと、政務の合間を縫うようにして、足しげく通うになっていた。

愛おしげに、ガイゼルの頭を撫でる女。

それは、あの夜。

ガイゼルの伽の相手をしたナディーンであった。

二人の間に流れる空気。

それは、甘やかで親密なモノ。

あの夜から、この二人の関係は始まった。

あの時、些かやり過ぎたと反省したガイゼルは、自分に怯えるナディーンに、出来るだけ優しく話し掛けた。

「ナディーン」

「ヒツ…はっ…はい…」

しかし、声を掛けた事で、更にビクッと肩を震わせ、切れ切れの声で返事をしたナディーン。

その態度に、ガイゼルは、苦笑し。

「そう怯えてくれるな…もう、何もしない…悪かった」

と、小さく謝罪を口にした。

そして、そうした事もあり、あの夜から、少しづつ互いへに、歩み寄っていった二人。

マリエッタの様な華やかな美とは、まったく違った美しさを持つナディーン。

いつしか、その控え目で、大人しい性格に、ガイゼルは癒しを感じていた。

どちらかといえば、今までに側室にした女達は、その誰もが、華やかな美を放っていて、性格もキツイ。

愛するだけならば、良いが、それに安らぎを感じるか？といえば、ガイゼルは、そうではなかった。

それもあって、三ヶ月が経過した今、ナディーンは、ガイゼルの寵愛を一心に受けるようになっていた。

執務室に戻ったガイゼルは、マリエッタ懐妊の知らせを聞き、一拍の間を開けた後。

「……。そうか…皇妃に子が出来たか…後で、会いに行くと伝えよ」  
と、素っ気なく言った。

だが、その心の内では、様々な想いが交差していた。

（……アレが…母親になる…か……）

マリエッタと知り合って十数年。

彼女は、清らかな少女から妖艶な女へと華麗なる変貌を遂げて尚、  
変わる事ない思いを持っている。

(……何なのだろうな……この感情は……)

自分達の間にあるのは、愛という名では、表現しきれない感情。

もし、ただの人であれたなら、今とは違っていたのかもしれない……。

そう考えた事もあった。

だが、すぐに。

(……いや……違うな……この身分だからこそ……出会えたんだ……)

と、思い直す。

初めて会った時から。

コイツには、敵わない。



そう思ってきた。

ただ愛するには、苛烈すぎて、ただ恋をするには、強すぎる女。

狂おしい程に、愛していながらも、愛せない。

それを形にしてはいけない。

そう……。

多分、自分達は自分達の死の間際までは、互いを求めてはいけない。

だからこそ、二人が確かに愛し合ったという目に見える証。

そんなものは、求めてはいけない。

そう考えてきた。

「…皮肉ものだ…過去の悲劇が、きつかけになってしまった…」

果たして、自分は愛せるのだろうか？。

あの女が、この世に生み出す子供を。

## 少し前のこと

これは、少し前の出来事。

その日。

一人の側室が、自身の月のものが遅れている事に、疑問を抱いていた。

今までにも、月のものが遅れる事は、何回があった。

それ故、最初こそ気にもしていなかったのだが、あまりに遅れている為に、次第に側室は自身の懐妊の可能性を疑った。

すぐにでも、医者に見てもらおう。

そう決めた側室は、内々に、一人の医者呼び出した。

そして、やはり…。

側室は、懐妊していた。

嬉しさのあまりに、泣き出しそうになりながらも、側室は医者に言った。

「貴方に、頼みがある」

「何でございましょう？」

医者が聞くと、側室は、自身の腹に手をやり、優しく撫でながら。

「この事は、私から陛下に直接、お伝えしたい」

と、言った。

すると、医者は、満面の笑みを浮かべて答える。

「畏まりました。おめでとつございます」

「ありがとうございます」

この時。

この事実を医者から、伝えていねばと、後になって側室は後悔した。

彼女が懐妊を知ったその時、マリエッタもまた、自身の懐妊の可能性を疑っていた。

懐妊した女が二人。

一人は、マリエッタ。

もう一人は…。

だれあろうナディーンだった…。

## 自業自得

皇妃懷妊と同時に舞い込んできた側室の懷妊の知らせに、ガイゼルは頭を痛め。

「時期が悪すぎる」

と、小さく呟いた。

皇妃の子供と側室の子供。

同じ時期に生まれるだろう二人の子。

これは、一波乱あるだろう。

「…悪いのは俺…か…」

そう自嘲気味に言った後、ガイゼルは側室の子供をどうするか、確認する為に、マリエッタの元へと向かった。

後宮とは、皇帝の女達が住まう場所であり、真の主は皇帝だが、そこを管理し、統括しているのは、皇妃であるマリエッタである。

だからこそ、皇妃は誰よりも、側室達の事に詳しい。

側室が懐妊したという話も、既に知っているだろう。

通常ならば、側室が身籠った事に、問題は無い。

だが、今回は世継ぎの関係もあつた。

しかし、ガイゼルは確認しに向かう途中。

「…あれの考えなど…一つしかないがな」

と、また小さく呟く。

「あれは…他の女が身籠ったぐらいで、動揺する女ではない。…これぐらいで、動揺する女なら、俺は…苦労しないさ…」



## 騎士の独白2

ガイゼルが人知れず悩んでいた時、ジーンは皇妃懐妊の知らせに浮足立つ後宮の中を悠然と歩いていた。

だが、内心では。

（あいつが、母親、ねえ………なんか、想像つかねえんだよなあ………）  
と、考えていた。

マリエッタを少女の頃から知っている身としては、ジーンの心境は複雑だった。

人並みの幸せを望まず、茨の道を歩む事を選んできた少女。

昔の彼女には、自らが母親になるという選択肢は無かった筈だ。

そんな少女が女となり、今は母親という存在になった。

時とは、面白いもんだと、ジーンは考えた。

そして、フッと、ある女の姿がジーンの脳裏に浮かんだ。

母親という存在に、誰よりも相応しくなかった女。

事実、その人物は自身の死の最後まで、母親ではなく、**女**であり続けた人。

「……プリムラ様……」

思わず、ジーンは呟く。

だが、次の瞬間、ハッと我に返ったジーンは、サッと辺りを見回した。

そして、辺りに人気が無いと分かると、ジーンはため息を吐き出す。

「はぁ……」

誰かに聞かれることなく、後宮の騒がしさに消えた眩き。

いつもならば、昼間は静けさに満ちた場所である筈の後宮。

だが、今は活気に満ちていた。

その活気に、ジーンは救われた。

あの名を口にしたと、もし万が一にも、マリエッタに知られる事があれば、ジーンでも、ただでは済まないだろう。

マリエッタにとって、‘プリムラ’という名。

それは、最大の禁句。

ジーンの記憶にあるその人は、少女の様に笑ったかと思えば、次の瞬間には妖艶な表情を浮かべる一人が大嫌いで、静けさが嫌いな人。

そして……。

誰よりも、恋多き人だった。

ジーンは、マリエッタの懐妊の知らせを受けた辺りから、感じていた胸に沸き上がる妙な違和感が拭えずにいた。

（んん）……此処は情報が命の場所の筈だよなあ……なら……なんで、三ヶ月も分からなかったんだ？……）

これは、男の自分から見ても、妙な話。

例え、マリエッタ自身が頓着しなくとも、マリエッタの側には、主第一のあの‘女達’が居る。

大事な主の些細な異変も見逃さない奴等が、こんな一大事を見逃す筈はなく、また周りの事に気づかない筈もない。

しかし、すぐにジーンは。

（…アイツ等の事だ…気付いてて黙ってやがったって、オチだろうがなあ…）  
と、考え直した。

後宮とは、悪鬼羅刹の巣窟。

故に、力の強い皇妃とはいえ、その身に何かがあるか分からない場所である。

（今回のコレも、アイツ等が全部、計算した上での事だろうな…）

多分、マリエッタも巻き込んだ上で、出来うる限り発覚を遅らせたのだろう。

マリエッタを守る為に…。

あの‘女達’の中でも、特に、ビエラとビーラの姉妹は自分の全てをマリエッタに捧げ、マリエッタに尽くす事が史上の喜びであ

ると公言して憚らない部類の女達。

『アイツ等は、タヌキ爺ならぬ、女狐共だ…人を騙す事なんて簡単  
ってか…やってらんねえなあ…』

ジーンは、そう母国語で、毒を吐くと、その‘女達’の元へと足を  
向けた。

ヘタレな夫、強い妻（前書き）

お気に入り登録が6件もあって、嬉しいですよ！これからも、よろしくお願いします！

## ヘタレな夫、強い妻

側室の子をどうする？と、聞きに来て、情けない顔をしているガイゼルを前に、愉快そうな笑みを浮かべマリエッタは言った。

「ガイ。貴方は何を心配しているの？側室である彼女が懐妊したら、それは喜ぶべき事よ。それに、この子は、民の望んだ子。この子は民の為の子なんだから」

言外に、ガイゼルが子の父親である必要はないのだと、言われた気がした。

いや、気がしたのでは無い。

はつきりとマリエッタはそう告げている。

「私の愛と民の愛情がこの子は育てるわ。だから、貴方はナデイン殿を大事になさい」



そして、皇帝でありながら、ガイゼルは有無を言わず、マリエッタの住む宮から、追い出される。

まるで、入ってくる事を拒むようにして、閉められた扉の前で、ガイゼルは、ため息を吐き出した後、歩きだす。

強く、したたかな女が言った通りにする為に…。

こうして、時は静かに、されど確実に流れていき。

マリエッタは、皇子を産んだ。

自らによく似た宵闇の髪を持つ皇子を。

そして、マリエッタの出産から数時間後、ナディーンも皇子を産む。

ガイゼルによく似たプラチナブロンドの髪を持つ皇子。

黒と金。

対照的な色の皇子達。

## 宵闇と明星

そして、マリエッタはその言葉通り、自らの愛だけを注ぎ、皇子を育てる道を選び。

ガイゼルは、ナディーンを支えながら、二人分の愛を注いで、皇子を育てた。

誕生から、数年後。

持つて生まれた色も違う皇子達は、その気質の違いを見せはじめ。

後に、宵闇の皇子と呼ばれる事となるマリエッタの子。

名をジークフリード。

後に、明星の皇子と呼ばれる事となる側室ナディーンの子。

名をアルビオール。

まず、ジークフリードの方は常に冷静で、必要だと判断したら、自らの手を血に染める事も厭わず、人を引き付けるカリスマ性に溢れた少年に成長し、母親であるマリエッタの本質をものの見事に受け継いだ。

対して、アルビオールはナディーンの気質とガイゼルの素養を受け継いだ。

全ての物事を冷静に見極める眼と慈愛の心。  
人をホッとさせるその微笑みは、信奉者すら居る。

何もかもが違う二人の仲。

それは、周りの反応に反して、良好なもの。

それにジークフリードは、これだけは理解していた。

自分という存在。

それは、タイラント皇帝ガイゼルには必要な存在だと。

## 兄と弟

権力的には、微妙な位置関係に居るナディーン達親子。

時に、彼女達を取り巻く環境は、優しいものだけではない。

ある時。

アルビオールに、こう告げる者が居た。

『皇子。御寵妃様の御子であられる貴方様が望まれるなら、我等は貴方様を世継ぎに推しましょうぞ…』

考えの足りない浅はかな者の言葉を聞いたアルビオールは迷わず、その足で兄の元へと行き。

「ジーク兄様。僕は…兄様を追い落とさなければ、いけないの?」

と、素直に聞いた。

対するジークフリードは、その質問に、淡々と答える。

「何故、そんな事を聞いてくる?…まあ、答えてやろう簡単な話だ。出来るならやってみろ…ただ…俺は簡単には追い落とせんぞ?」

その後。

アルビオールは、言われた事をすべて話した。

「ねえ、兄様。何で、あの人達は、僕を推すのかなあ？」

「これも、簡単な話だ。お前の母上には、皇帝以外の確かな後ろ盾が無い。しっかりとした後ろ盾のある母上の子供の俺より、お前が帝位を継いだ方が、多く利を得る者が出てくるからだ」

幼いなりに、アルビオールは理解していた。

この手の話は、自分の母よりも自分達の父よりも、この兄に話した方が早く、そして簡単に解決されるという事を。

「アルビオール。お前はとうしたい？そいつらの甘言に騙されて、この俺に牙を向けるか？」

心底、楽しそうにそう聞くジークフリードに、アルビオールは答える。

「しないよ。兄様に牙なんて、向けたら…僕の…最後だもの」

「ふん。気が変わったら何時でも良いから、向かって来い。全力で

応戦してやる」

普通とは掛け離れた兄弟の会話。

たいていは、この様なやり取りの後、アルビオールに馬鹿な甘言を吹き込もうとした者は、王宮からも、この国からも消える。

だが、愚か者は後を絶たない。

だからこそ、アルビオールは必死で、物事を見極める目を養った。

偉大な兄を少しでも、煩わせない為に…。

実際、ジークフリードは煩わしいとは思った事はない。

本当に煩わしいなら、歯牙にも掛けないのが、ジークフリードという存在。

だが、逆に煩わしいどころか、ジークフリードは自分とは、違う素養を持つこの弟を好ましく思っており、マリエッタもジークフリードとはまったく違う素養持つアルビオールを高く評価している。





### 騎士の独白3

（しかし…あの皇子も、なんだってあんな事を聞いてくるかねえ。  
やっぱ…血は争えないってか？）

先ほど、幼い子供の口から出たある疑問と質問に、ジーンは背筋がゾツとした。

成長するに従って、ジークフリードがマリエッタに似てきているのを感じてはいた。

だが、あの瞬間ほど似てきたと感じた瞬間はない。

性別こそ違うもののジークフリードは物事に対する考え方も、問題に対する対処の仕方も、未来に向けたビジョンも、幼少期のマリエ

ツタと似てきたと、言わざるおえない。

子は親に似る。

だが、マリエツタとジークフリードの場合、その率の高さは一種の異常ともいえた。

しかし、その反面。

父親であるガイゼルに、ジークフリードが似た所を探す方は難しい。

（何か、未恐ろしいぜ…）

性別以外、マリエッタを完全にコピーしたような子供。

ジーンは、子供の将来を想像すると、何やら微妙な気持ちになった。

## 寵妃の想い

ナデイン・カラウレア。

今や、第5皇子の生母となった彼女は、しかし、自分の立場をよく理解していた。

皇帝と皇妃。

二人の間にある激しい想いに、気付いていながら、黙したまま何も、語ろうとはしない。

彼女は、ガイゼルの自分に向ける感情が偽りのモノでない事を理解している。

恋と愛。

あの二人の関係は、そんな言葉では語り尽くせない何かがあるのだと、彼女は思った。

そして日々、成長してゆく我が子を見る度、彼女は皇妃マリエッタに思いを馳せる。

何故、自らが孕む事無く、10年もの間、自分以外の人間が孕むのを黙認したのか？。

側室達に優しくできるのは、何故なのか？。

自分では到底、真似の出来ない事を平然と行う皇妃に、ナディーンは疑問を抱かずにはられない。

ナディーン of 皇妃マリエッタのイメージは、凛としていて、毅然とした態度を崩さないというモノ。

そんなマリエッタに、女として、自分は負けていると、ナディーンは感じていた。

だが、不思議と悔しくないと、思った。

マリエッタに、敵愾心や対抗心を抱く理由が、ナディーンには無い。

本来なら、皇妃と側室は、皇帝の寵を競い合うべき関係である。

だが、マリエッタとナディーンは、争わない。

滅多に、三人が顔を会わす機会はないのもあるが、三人で会う場合、常にマリエッタは、ナディーンがガイゼルと居ると、一歩下がった形を取る。

勿論、ガイゼルも、その事には気付いている。

だが、何も言わない。

絶対の信頼が、そこにはある。

何時しか、ナディーンも、理解する。

二人の間にある絆。

それは、決して他者が踏み込むことの出来ないモノだと。

ナディーンは、そんな二人が少しだけ、羨ましく思えた。

だが、すぐに思い直す。



自分には愛だけで、良いのだと。

自分に、愛以外を背負う覚悟はない。

二人は、二人だからこそ、そんな関係が続けられるのだと、ナディーンは気付いた。

## 宵闇の想い

ジークフリードは、己の両親が不思議な関係を築いている事に、疑問を持った事は無かった。

幼いながらも、よく理解していた。

この世には、不思議な縁を持った男女がいる事。

愛という感情が人によって違うという事。

秘めた覚悟を貫く強さが人にあるという事。

だからだろうか、ジークフリードは、いつからか、ある事を思うようになった。

将来、妻となる女性を迎える時が来たら、母のような人を迎えたいと、そう考えるようになっていた。

そして、ジークフリードは既に、妻としたい女性を定めていた。

もし、自分が成人するまで、その彼女が未婚のままならば、求婚しようとして、考えるようになっていた。

この世界では、女性は、二十歳前には、婚約して、すぐにも婚礼を挙げるのが通例。

二十歳を過ぎても、未婚のままの女性など、地位や身分に差はあれど、品位や性格などを疑われ、敬遠されるのが世の常。

しかも、その女性は、ジークフリードよりも、10才も年上。

既に、婚約していて当たり前の年齢。

だが、ジークフリードには、ある確信があつた。

その女性だけは、二十歳を過ぎても、婚礼を挙げはしないという確信があった。

その女性の名は、ウルリカ。

ウルリカ・エセル・カウザー。

カウザー王国第一王女。

この当時、15才。

だが、婚約者はおらず、決まった相手も無かった。

彼女は、国内外の男達から、敬遠されていた。

何故なら、当時から既に、彼女は男装の麗人として、諸国に名を知られていたからだ。

並の男よりも、男らしく、剣の腕、馬術、それらにも優れていた。

男装の姫君ウルリカ。

ジークフリードが初めて、ウルリカに出会ったのは、5才の事、あの祝賀会の席での事だった。

ウルリカは、国賓としてタイラントに招かれていた。

幼いジークフリードは、その時の彼女の立ち居振る舞いに、少なからず魅了された。

自分の将来の伴侶は、彼女しか居ない。

そう思えるほどに、ウルリカは、ジークフリードが考えうる妻の条件を満たしていた。

だが、声を掛けようにも、ウルリカの周りには、彼女に魅了された女性達の壁が幾重にも、出来上がっており、声が掛けられなかった。

そして、ウルリカは祝賀会が終わると、足早に、帰って行った。

なんの接触も出来ず、落ち込んでいるかに見えたジークフリードだったが、母であるマリエッタに、祝賀会の後、こう言った。

「母上。私は、妻としたい人を見つけました」

突然、五才の子供から、そんな発言をされたら、普通の親なら驚く



だろう。

だが、ジークフリードの母であるマリエッタは、普通とはかけ離れた存在。

そんな発言をした息子の顔を面白そうに眺めた後。

「一体、どんな姫君が、お前の心を射止めたのかしら？」

と、愉快そうな声音で、言った。

そして、ジークフリードは。

「私が妻としたい方は、カウザー王国第一王女ウルリカ様です」

と、はつきり答える。

その言葉に、マリエッタは、笑いがこみ上げてくるのを耐えた。

自分よりも、年上の王族を妻としたいと言う息子に、マリエッタは言った。

「ジークフリード。お前が、あのウルリカ姫を望んだとしても、彼女は、もう適齢期の姫君。お前が成人するまで、未婚のままで居ると思うの?。」

しかし、そんな意地悪な質問に、ジークフリードは、言い返した。

「母上。あの方ならば、私が成人するまで、未婚のままで、過ごされますよ。」

「あら、それはまた凄い自信ね。」

そうは言っても、マリエッタにも、ある確信があった。

カウザー王国第一王女ウルリカ。

マリエッタは、彼女の男装の理由を知っている。

その理由がある限り、彼女は男装を続けるだろう。

凜々しき姫君を妻に望む息子。

それは母親としても、一人の女としても、面白いと、マリエッタは思った。

故に。

「お前の決めた事ならば、私は反対はしない。もし、お前が成人するまで、彼女が未婚のままならば、求婚しても、良いと思うわ」

と、言った。

こうして、ウルリカ本人が知らぬ間に、話は進んでいった。

## 男装の姫君の憂鬱

ウルリカ・エセル・カウザー。

諸国に、男装の姫君として知られる彼女。

175センチの長身に加えて、その眼光の鋭さは、彼女から女らしさを奪っていた。

それだけではなく、王族の姫ならば、出来て当たり前の裁縫は、大の苦手。

淑女の嗜みといわれる様なことも、彼女は苦手であった。

彼女が得意なものと好きな事。

それは、剣を握り、武術を磨く事と馬術。

帝王学を独自で学び、戦術書を読み、それを頭に入れる事。

おおよそ、姫らしい事など、生まれた時から、縁がないのだ。

彼女には、偽りの男である事が、半ば義務になっていた。

こんな女では、嫁の行き手はない。

そう15才にして、ウルリカは悟っていた。

まだまだ適齢期ではあるが、誰も自分を妻にはしないだろう。

いや、したくはない筈だと、思っていた。

ならば、好きに生きるまでだと、そうも思っていた。

だが、自分が女であるという事実と男装を続けなければならない現実。

その狭間で、15才のウルリカは、悩んでもいた。

自分は、いつまで男装を続けるのだろうか？。

と、自問自答した事もあった。

男装を止めれば、女として生きられるだろうか？。

と、考えもしたが、自分から男装を止めれない事をウルリカは、痛感していた。

まさか、この時から、自分を妻にと望む存在が居るなど考えもしないウルリカだった。

もし、その相手が、まだ五才の子供と聞いたら、ウルリカは鼻で笑

った事だろう。

ありえない。

と、言っただろう。

だが、一方的な想いは、いつの日かウルリカを巻き込んでしまいうだろう。

だが、この時のウルリカは、まだなにも知らない。

将来、自分が皇太子妃と呼ばれる日が来ることも、知る由もない事であった。

## 宵闇、動く（前書き）

お気に入り登録20件を越えましたー！凄く嬉しいです！



## 宵闇、動く

時とは、早く過ぎるもの。

子供だったジークフリードとアルビオールも、共に18才と成っていた。

ジークフリードは、15才の時、皇太子として、皇帝より正式に指名され、職務に励んできた。

そして、最近では周りから、皇太子妃選びを迫られる様になった。

今までなら、その度、のらりくらりと、その件を保留にしてきたジークフリードだったが、近頃は、そろそろ動いても、良い頃合いだなと、思っ様になっていた。

やはりというか、ジークフリードが、五才で、自分の妻と定めたウルリカは現在も、独身。

王族としては、完全な行き遅れと成っていた。

だが、ウルリカの容姿は悪い訳ではない。

どちらかと言えば、美女の類に入るだろう。

紫色の切れ長の瞳に、スツと通った鼻筋、ぼってりとした唇。

女性としては、やや高身長ではあるが、その身長が逆に、彼女の魅力を引き立たせていた。

ウルリカには、凜とした美しさと、その中に、少しの色気が見えて

いた。

しかし、男装の姫君の名は、彼女から結婚を遠のかせた。

だが、それはジークフリードにとって、喜ぶべき事。

三年という期間で、皇太子としての地位も、安定してきた。

今ならば、ウルリカを妻と望んでも、誰にも文句は言わせないだけの力が、ジークフリードにはある。

だが、このジークフリードの考えを13年経って初めて聞く人物が居た。

それは、父であるガイゼルだった。

その日、ジークフリードがいきなり、執務室に来たかと思えば、開口一番。

「父上。カウザー王国の第一王女ウルリカ姫を私は、皇太子妃に迎えたく思います」

と、言った事で、ガイゼルは。

「な、何？ジークフリード。今、なんと言った…？ウルリカ姫と言ったか？あの男装の姫君のウルリカ姫か？」

息子の発言に、混乱しながら、そう聞き返すしかなかった。

ジークフリードは、そんな父親を前に、冷静に答える。

「はい、私は男装の姫君と名を持つウルリカ姫を皇太子妃に迎えた  
いと言いました」

聞き間違いであってくれと、少しだけ思っていたガイゼルだったが、  
聞き間違いではないようで、頭が痛くなってきた。

何で、よりもよって、ウルリカ姫なんだ？と、思った。

ジークフリードよりも、10才年上であるウルリカは、あまり評判  
が良いとも言えない

二十歳を過ぎても、結婚出来ないのには、出来ないりの理由が存  
在する。

まあ、ウルリカの場合は、男よりも男らしい男装の姫君だったから  
だが、それでも、二十歳を過ぎ、30間近の姫君を皇太子妃にとは、  
外聞が良いとは言えない。

だが、ガイゼルは、すぐに、この息子は、良くも、悪くも、マリエツタに、瓜二つだと思った。

だからこそ、何かしらの考えがあるのだろつと、思い直し、再度、聞いた。

「ジークフリード。お前は、本当にウルリカ姫を皇太子妃に迎えたのか？」

すると、ジークフリードは。

「はい。私の正室となれるのは、ウルリカ姫以外には、あり得ません」

と、答えた。

揺るぎない意志が、そこにはあった。

父親として、そんな息子の決意にも似た想いをくみ取ったガイゼルは、溜め息を一つ付くと。

「好きにすると良い。お前の伴侶だ、お前が選んだのなら、私は反対はせん」

そう言った。

すると、ジークフリードは、嬉しそうに。

「ありがとうございます！では、親書をガウザー王国に送っていただけのですね」

と、言った。

そんなジークフリードの姿に、ガイゼルは驚いた。

滅多に、笑わない皇子として有名なジークフリード。

そのジークフリードが、笑みを浮かべていた。

よほど、嬉しいのだなと、ガイゼルは思った。

しかし、親書を送るのは良いが、相手が内容を見て、それを了解するかどうかは、分からない。

だからこそ、ガイゼルは。

「ジークフリード。親書は送るが、相手からの返事までは…どうなるか、私には分らないぞ」と、言った。

すると、ジークフリードは。

「必ず、了承して下さいますよ」

と、自信ありげに言い切った。

その姿に、ガイゼルは、思わずマリエッタを重ねた。

（やはり、ジークフリードは、私よりも、マリエッタに似ているのだな…）



少しだけ妙な気分になってくるガイズルだった。

## 驚愕の知らせ（前書き）

サイトにあるストックを全部、出しました。

なので、これからは、不定期更新になるかもしれません。

## 驚愕の知らせ

その知らせを聞いた瞬間、ウルリカは息を飲んだ。

ありえない!？。

と、そう叫びそうになった。

だが、幾ら嘘だと思おうと、そこにはしっかり書かれていた。

自分を妻に望むという内容が書かれた紙。

ウルリカは、自分みたいな年増を妻にしたいなんて、皇太子は、何を考えているのか？と、思った。

そして、とりあえず、ウルリカは事の真意を父である国王に問う事にした。

しかし、父の執務室へ行くと、そこには思わぬ先客が居た。

「何故、姉様があの皇子に嫁がねば成りませんの！？父上、答えて下さい！！」

「だ、だからだな…そ、それは…」

「父上。だからでは、分かりませぬ！！」

可愛らしい顔を曇らせ、父を問いつめている二人の妹と、そんな妹達にタジタジな父。

一瞬、ウルリカは、気が遠くなった。

だが、気を取り直し、声を掛ける。

父ではなく、父を問いつめている妹達へと。

「エルレシア、アリス。いい加減にしなさい。父上が困っておいで

だわ」

すると、エルレシアは、ウルリカに向き直り言った。

「姉様。これは大事なことです！ちゃんと、話を聞かねばなりません！！」

興奮するエルレシア。

続けて、アリスも。

「姉上。私たちにも知る権利があるはずです」

と、言った。

全く引く気のない妹たちに、ウルリカは

「エルレシア、アリス。今回の事は、貴方達が気にする必要はありません。早く、出て行きなさい」

そう強く言った。

すると、エルレシアとアリスは、途端にうつたえる。

だが、ウルリカは更に、強く言った。

「二人とも、二度は言いませんよ」

すると、シュンとして、エルレシアとアリスは執務室から、出て行った。

そんな娘二人の姿に、父が。

「ウルリカ。何も、あんな言い方をせんでも良からう。二人は、お前を心配して、私の元へ来たのだぞ」  
と、ウルリカを責めるように言った。

しかし、そんな父に慣れているのか、ウルリカは、気にせずにつ。

「父上。甘やすのは構いませんが、統制が取れなくなりますよ？先ほどの様に…ね」

毅然としたその態度に、父は可愛くない娘だと、内心で思った。

しかし、ウルリカも、困った父上だなと内心で思っていた。

この父は、男装の麗人であったウルリカをどこか、疎んでいる。

凛々しい娘よりも、少し我が儘だが、器量良しの娘達の方が可愛いのだろう。

幼い時から、我慢を重ねてきたウルリカは、それをしょうがない事と諦めていた。

今更、男装を止めたからと、可愛い女にはなれないのだから。

そんな事よりも、今は事の真意を聞く方が先である。

「父上。あの話は本当なのですか？私がタイラントの皇太子に、望まれているという話は…」

すると、みなまで言わず、父は答えた。

「本当だ。お前よりも、年の近いエルレシアかアリスをと返答した

が、お前でなければならぬと、返事がきた」

ウルリカは、ここでも、あからさまな鼻唄をする父に、ため息が出そうになる。

だが、父も言ったが、ウルリカには自分よりも、エルレシアやアリスの方が皇太子には相応しいと思えた。

しかし、現実はそのはいかず、自分に話が来る。

何故、なのだろうか？。

そんな疑問を思わず、ウルリカは口にした。

すると、父は言った。

「あの皇太子は、何かをお前に見いだしたのだろうよ。だから、エルレシアやアリスでは駄目なのだよ」

ウルリカは、すぐさま聞く。



「皇太子が私に、何を見いだしたというのですか？」

すると、父はその問いに。

「多分、あの皇太子は…」

と、言った後、言葉を止めた。

「父上？どうなさったのですか？」

「…何でもない。とりあえず、お前は選ばれたのだ。早く、自室に戻り、出立の準備をしろ」

言うや、ウルリカは執務室から出されてしまった。

色々考える事はあるが、父に言われたとおりに、ウルリカは、まずは準備だと、気持ちを切り替える事にした。

だから、執務室に居る父が。

「あの皇子の求めるものを得るには、年若いエルレシアやアリスでは駄目だ。ウルリカでなくば、決して叶うまい…難儀な事よ」

と、言ったのをウルリカは知らない。

## 姫君の心配事

部屋に帰ってきたもののウルリカは、何もやる気が起きなかった。

ぼんやりと、窓の外へと目を向ける。

そして、庭の花を見ている内に、ウルリカは考える。

生涯独身だろうと、そう思ってきた自分が結婚する。

それも、相手は大国タイラントの皇太子。

これほどの良縁は他にはないだろう。

噂では、たいそうな美丈夫に成長しているらしいが、ウルリカの記憶にある皇太子ジークフリードといえば、幼児の姿。

今、どの様に成長しているかなど、想像できるわけもない。

不安が胸にわき上がる。

女としての自分に、ウルリカは全く自信がない。

その人生の大半を男装し、女を捨てて生きてきた。

皇太子ジークフリードが、自分に何を期待しているのか、それが分からない。

分からないからこそ、不安になる。

もし、自分が皇太子の期待に応える事が出来なかったら、それによって、必要とされなくなったら、そう考えるだけで、ウルリカは震えが止まらなくなった。

ウルリカは、他者からの賛美に興味はない。

だが、存在を否定される。

それには、恐怖すら抱いている。

強くみえて、ウルリカは少しだけ弱い。

本当の彼女は、凄く傷つきやすい。

だが、誰も彼女の本来の姿を知らない。

ウルリカは、他者に対し、強い自分を演じている。

男装を強いられた事で、ウルリカは自分を偽らなければならなかった。

だが、今回のこの話で、ウルリカは転機を迎える事となる。

## 男装の姫の過去

ウルリカが男装している最大の理由。

それは、母親のある願いが原因である。

ウルリカの母マリーベルは、王妃という立場にある。

彼女は、昔から生むなら、男の子が良いと、そう思って、生きてきた。

しかし、男の子を望むのは、栄華を得る為ではなかった。

男の子ならば、自分の手元に、ずっと居てくれる。

だが、女の子は、成長してしまえば、誰かの元に行ってしまう。

という思いからだった。

だが、マリーベルが最初に生んだのは、女の子であるウルリカだった。

生まれた我が子が可愛くないわけではない。

しかし、女の子であった事に、マリーベルは、落胆の色を隠せなかった。

そして、マリーベルは、次こそ！と、意気込んだ。

だが、マリーベルは、医者から言われた。

次の妊娠は、難しいだろうと。

それを聞いたマリーベルは、人目も気にせずに、大泣きした。

そんなマリーベルを見た周りは、世継ぎを産めないせいで、王妃は泣いたのだと、誤解した。



しかし、マリーベルは、そんな理由で泣いたのではない。

だから、彼女はある願いを夫である王へと口にした。

それこそが、生まれたばかりのウルリカを男として扱うというものだった。

最初、王はその願いに、難色を示した。

だが、マリーベルから。「あなたには、娘ならば、まだ居るではありませんか、ですが私には、この子しかいません。ならば、私の好きなように育ててはいけませんか？」  
と、言われ。

確かに、側室の二人が、マリーベルとは、3日違いで、娘を一人づつ生んでいた。

ならば、一人ぐらい毛色の変った娘が居ても、構わないだろうと、そう思い直し、マリーベルの好きにさせる事にした。

勿論、男の様に育てても、王位継承権までは認めないと、はっきり

伝えた上である。

こうして、ウルリカは、男装の姫君となったのである。

## 意外な出来事

ジークフリードがウルリカを皇太子妃にするという話は瞬く間に、周辺諸国に知れ渡った。

そして、それを知った国の内、ワース、ラズリア、カウラの王達は揃って、同じ事を言った。

男装の姫ウルリカが皇太子妃になれるならば、我が国の姫を側室としてでも良いから、迎えて欲しいと。

王達は皆、それぞれ自分の娘の扱いに困っていた。

様々な問題を抱える三人の姫君達。

三人の内、一人目は皇妃マリエッタの母国ワースの姫。

彼女は、自らの住まう離宮に、女だらけのハーレムを築いている。

名はマリアンヌ・ヘルガ・ワース。

ウルリカの様に、彼女も、常に男装し、男より、女の子が大好きと公言して憚らない。

御歳27才。

だが、彼女曰く、男が嫌いというわけではなく、自分の審美眼に合う相手が居ないから、結婚しないだけらしい。

三人の内、二人目はタイラントの西に位置し、肥沃な大地を有するカウラ王国の姫。

名はエリシア・パルク・カウラ。

彼女は、王族には珍しく、大が付くほどの守銭奴。

お金が大好きで、長年に渡り、貯めた金銀財宝を眺めるのが趣味という一風変わった姫君である。

御歳26才。

そんな彼女が、今まで結婚出来なかった理由、それは結婚に掛かる費用の大きさが一つの原因である。

自分が出すわけではなく、他人が出す費用の大きさも我慢できないらしい。

そんな彼女だが、彼女も、自分の審美眼に適う相手ならば、結婚に文句はないそうだ。

三人の内、三人目はワースの隣国ラズリアの姫。

名はメルル・タス・ラズリア。

彼女の趣味。

それは、ありとあらゆる武器を集める事。

武器の不思議な魅力に取り憑かれた彼女は、自ら国の兵士達の武器の買い付けに走り、武器の感触や手触りを堪能する日々を過ごしている。

御歳27才。

そんな彼女も、自らの趣味を理解してくれる相手ならば、結婚しても良いと思っている。

彼女は武器が異常なほど好きという以外に、欠点らしい欠点はない。  
だが、武器に関して、その情熱は凄まじいと言わざるを得ない。

強烈な個性を放つ姫達。

そんな姫君達の事を知ったマリエッタは。

「面白い。会ってみたいわ」

と、姫君達をタイラントに招待することを決めた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2228u/>

---

宵闇の皇子様と明星の皇子様

2011年11月23日19時45分発行